

初めてのレストランが、入った名刺をくれたのはあな
うだ、と言ったら、きつと彩菜はその前にメ
そもそも先にメールをくれたのは彩菜のほ
と、言うが、そうだっただろうか。
「先に手をつないできたのは裕弥のほうだっ
た」
「彩菜はあの時、
やなかつたつけ。
うな感じで二人は付き合うようになったんじ
ともなく手をつないで、それがきつかけのよ
た、帰りに並んで歩きながら、どちらから
事に行き（確かこのときはカレー屋さんだっ
でもあの数日後にまた帰りに落ち合って食
と口をとがらせる。
「あれはデートじゃない。食事に行っただ
け」
言うとき彩菜は、
初めてのレストランはうどん屋だったよね、と

red season
秋

「おなかですいた」
「疲れた顔で部屋に入ってきて、
菜は来た。」「
「ないな」と思っていたら、夜の十時過ぎに彩
「今日、俺は休みだった。」「もう今日は来
「小一時間ほどしか一緒にはいられない。」「
「ことを考えるとあまり遅くはないから、
「トに寄っていく。」「
「あるので、俺が休みの日には彩菜は俺のアパ
「彩菜の会社と自宅の間で降りたところ
「運がよく（？）俺が住んでいるアパートが
「いようだった。」「
「俺とは違い、彩菜の仕事は休みが中々とれな
「不規則ながら週イチくらいは休みがとれる
「。それだけは偽りのない事実だ。」「
「うして彩菜と俺は一緒の時間を過ごしてい
「たまあ、そんなことはどうでもいい。今、こ
「たじゃない、と言うかもしれないな。」「

「ふうん」
「それは……、あるけど」
き合ったこと、ある？」
「裕弥はわたしと付き合う前に、他の人と付
「……」
「わたしって冷たいかな」
壁に寄りかかっただけで俺に横顔を見せていた。
「ん？」
「ねえ、裕弥」
は食べ終わって、食器を洗い片付けたようだ。
俺が夢中になっただけで、どうやら野菜
調べものをしていた。
菜が食べている間、俺はパソコンに向かって、彩
シチューと一緒にロールパンを出して、彩
れないと思っただけだ。
ところだった。もしかして野菜が来るかもしれ
れなくて、冷凍保存でもしようと思っただけだ。
ためてあげた。作ったものの一人では食べき
と、言うので、作ってあったシチューをあ

「悲しいどころかなにも感じないなんて。そ
ていた。横顔のまつ毛がぴんと反り返っ
つめていた。横顔のまつ毛がぴんと反り返っ
ないとしても情とか、わいているはずだし
時には悲しいものだよ。それほど好きじゃ
う。だけど付き合ってたから、やっぱり別れた
ど相手のことが好きじゃなかったんだと思
然悲しくなかったの。たぶんわたしはそれほ
つまりフラれたの。相手に好きな人が出来て
けど、別れたの。相手に好きな人が出来て
「学生の時から付き合っていた人がいたんだ
手の先の指で、三角形を作っている。その伸
両手を天井に向けて伸ばす。その伸ばした
んだけど」
「あのね、わたし前に付き合ってた人がいた
言葉を続けた。俺が考えていると、彩菜は
たのかな、なんて俺が考えていると、彩菜は
こういうことは正直に言わない方がよかつ
言いながら、彩菜は口をとがらせた。

れどころか、別れてちよつとホツとしたんだ
よ、わたし」
彩菜は少し間をあけて、続けた。
「ねえ、裕弥」
「ん？」
「わたしって、冷たいのかな」
前に付き合っていた人の話なんて聞きたくないと思つたけど、彩菜の切羽詰つたような様子が俺にそれを言わせなかつた。そして彩菜がどんな返事を期待しているのかわからなかつたけれど、俺は思つたことを言つてみた。た。少なくて、俺の知つている彩菜は冷たくなんじゃないよ」
俺のほうを見た。笑おうとしたようだった。が、その瞳にはみるみるうちに涙があふれてきた。彩菜は俺から目をそらし、両手で顔を覆つて声を出さずに泣いた。

安定になつてしまつている彼女に、俺は何を
してあげたらいいのだろう。
「岸本くん、ご指名よ」
と事務所の先輩に呼ばれた。
「イラストレーターたちばなの橋先生。岸本くんは原
稿取りにきて欲しいって。もう出来てるっ
て」
「わかりました」
先輩は俺を見ながら腕組みをした。彼女は
数ヵ月後に結婚を控えている。結婚しても仕
事は続けるそうだ。
「なんで岸本くん、気に入られてるんだろう
ね。あの先生、気難しいのに。なにか気に入
られるコツがあるの？」
俺は笑つてそれにはこたえず、
「じゃ、早速いつてきます」
と言つて、事務所を出た。
コツなんて特にない。たまたま橋先生と俺

が応援しているサッカーのチームが同じだったということだ。
橘あおい先生（ちなみに男性）の描くイラストはほのぼのとされていて、密かな人気がある。
以前うちの事務所に勤めていた人の友達というところで、仕事を引き受けてくれている。
そうだ。年齢は三十歳をちょっと過ぎたくらいだろう。
うか。金髪に近いような茶髪で、チャラチャラしている。
ラしている人なのかと思っただけ、口数も少な
くてすごく真面目な人なのだ。一見気難しそ
うだが、サッカーの話、特に好きなチームの
話になると、突然穏やかな楽しそうな顔にな
る。橘先生はこのことは、あまり他の人には言
うなと俺に言った。あまりプライベートなこ
とで人から干渉されたくないのだそう。だ
から俺はこのことは事務所の他の人にも言わ
なかつた。そんなわけです務所の人は、なん
で気難しい橘先生に俺が気に入られるているの

先生がいた。考えたながら顔を上げると、目の前に
ギリでもどこかにもぐりこめるだろう。：
だけど。まあいざとなったら、試合開始ギリ
たからなるべく早めに行つて並んでいたいの
から微妙なところだ。自由席しか取れなかつ
か。試合がある日は休めるだろう。か。土曜
トから取り出して眺めていた。ケットをポケッ
ばかりのサッカーの試合のチケットをとって
ても帰つてこず、俺はなんとなく取つてきた
すぐ帰ると言つた割には十五分くらい過ぎ
住むマンションの部屋の前立つていた。
関で待つていてくれと言われ、俺は先生が
携帯に電話をしたら、もう少しで戻るから玄
受け取りに行つた時、先生は出かけていて、
二年ほど前に初めて先生のところに原稿を
いうだけなんだけど。
うか、同じサッカーチームを応援してるとい
かわからないのだ。気に入られていてい

合の、同じチームの自由席のチケットだった
見ると、俺が買ったのと同じ日の、同じ試
を俺の目の前に出した。
たジャケットのポケットから取り出したもの
俺がこたえ、先生はもぞもぞと着てい
です。」「え：：つと、ほとんどJ発足当時から：：
「あ、はい」
「そのチームが好きなのか」
「あ、はい」
とぶつきらぼうに言った。
「好きなのか、サッカー」
て、先生はじろりとまた俺の顔を見た。そして
俺はチケットをしまおうとしたのだが。
していたチケットを覗き込んだ。あ、と思っ
を見てから俺の横を通り過ぎる時に俺が手に
俺が慌てて言う、先生はじろりと俺の顔
「あ、お帰りなさい」

「君はいいつも自由席？　いつも並んでるの
もどうにかなることもありません
人か二人くらいだった、あまり並ばなくて
「そうですね、みんな並んでますね。まあ一
自由席は並ばないとダメなんだろう？」
席で行くんだが、今回は取れなかったから。
「僕は自由席は初めてなんだ。いつもは指定
う。と先生は玄関の鍵を開けながら、俺に言
ものだから、待たせてしまった。ところで
て。今、受け取って来た。相手が遅れてきた
て諦めかけていたら譲ってくれて人がい
「今日発売だったこのチケット、取れなくっ
差し出された手と握手をした。
「仲間だな」
近感をもってしまった。
気になった。思わず緊張がふつととけて、親
った。笑うと別人みたいに親しみやすい雰囲気
俺は驚いて先生を見た。先生はにこっと笑
た。」

か？
「大体自由席ですけど、時間的に並べないこ
とが多くて。たまにほとんど試合が見えない
ようなところになっちゃうことがあります」
「えっ、せっかく行って試合が見づらいんじ
ややってられないな」
「早めに行っても、常連さんのグループに席
取りされてたりするんです。運がよければい
いところにいけますけど」
「君は何時ごろに行くんだ？ あ、他の仲間
と一緒に行くのか」
「もしかしたら仕事かもしれないので、ギリ
ギリになっちゃうかもしれないです。行くの
は一人でです。前は一緒に行く友達がいたんで
すけど、そいつはJ2に降格した時にサポを
やめました」
「ふん：：」
「先生は俺を見て、にやっと笑った。
「僕も今回は一人で行くんだ。じゃあ、一緒
はどうだ？ 僕はその日は仕事を入れないよ

「熱くなりそうですよね」
「いもんだ」
「自由席は初めてだったけれど、応援も楽し
と試合後に先生は言った。
「楽しかったな」
だ。
た時には先生と俺はハイタッチをして喜んで
ろん俺も大声を出して応援した。
ターと声を合わせて熱く応援を始めた。もち
思ったが、試合が始まると先生は他のサポート
よ！」
先生は不機嫌だった。どうなることやらと
くる奴の分まで多めに席をとるんじゃない
「席、あんなに空いてるじゃないか。後から
っっている場所もなかったことがある。
だ。俺なんか、試合前の列整理があるまで立
た。立つ場所が確保できただけでもいい方
と仏頂面で試合が見にくい場所に立ってい
「いい場所、とれなかったぞ」

「ああ：：、結局PKになっちゃったけど」
「いかけていった選手の必死の姿です」
「行って行った時、その選手を止めようとして追っ
たりになっただけで、相手選手がゴールめがけて突っ走
れられないの、うちの選手が抜かれてフリー
「もちろんスタジアムにいました！俺が忘
「先生もあの時いたんですね」
「みんな待ってたよな」
「みんな待ってたよな」
「力が抜けましたけど：：、でもまた選手た
ちが出てくるまで待ってましたけどね」
「うん」
「た」
「ちやっただ姿を見たことの方がシヨックでし
挨拶もなしにうなだれて控え室に戻っていつ
プレーで俺を励ましてくれていた選手たちが、いつも
ツクだったんですけど、選手たちが、いつも
「あ、はい。俺はなんてゆーか、降格もシヨ
スタジアムにいたのか？」
「君は：：、J2降格が決まった試合の時も

「でも入れられませんでしたよ！」
「だな」
「あー、ゴールが決まった瞬間……あの試合は感動的でした」
「で、去年のカップ戦の決勝は？」
「もちろん行きましたよ！それがですね、J2降格の時にサポやめた友達からいきなり連絡があつて、行きたいっていうんですよ。チケット二枚とつてあつたんで一緒に行きましてけど、負けた後ですけれどね、やっぱり所詮この程度だよな」とかっは「やっぱり！」この程度だよなと、言つたんですよ！ムカつきました。あんなヤツとは二度と一緒に行きませぬ。それにしても決勝まで行って負けるつてのがあんなに悔しいことだつて、初めて知りまして。準備勝だつていい成績だと思ふんですけれど、全然嬉しくなかつたです。ね。で、帰りながら携帯からサポーターのサイトを覗いたんです。無

「仕事、きついのか？」
「て、今までは聞かなかったけど、今夜は初めて部屋にやってきました。彩菜は今夜も会社帰りに疲れた様子で俺のけどね。」
「し、か、と、れ、な、く、も、時、間、が、と、れ、る、時、は、行、っ、て、る、アムには行かなかった。俺は一人でも自由席先生はその後、指定席がとれないとスタジオでも、もう並びはコリゴリだな。」
「でも、もう並びはコリゴリだな。」
「そうです、ね、はい！」
「：：今年はタイトル欲しいな。」
「き込みました！」
「にしたくない気持ちにはみんな一緒だ！」
「と書き込みです。思わず、『この悔しさを無駄にしよう』って落ち込んで後ろ向きになっていた。俺はなんでこのチームのサポーターなんだ。た、く、さ、ん、あ、っ、た、ん、で、す、け、ど、覚、え、て、る、の、は、理、矢、理、前、向、き、に、な、ろ、う、と、し、て、い、る、書、き、込、み、も」

と聞いてみた。彩菜は少し間をあけた後、
声もなく、こくと頷いた。でもすぐに顔を
上げて、
「ううん、大丈夫。そんなに大変なわけじゃ
ないから」
と否定した。
「ムリすんな」
俺はポンと彩菜の頭をたたいた。毎日こん
なに遅くて休みもないなんて、きつくはないは
ずがない。仕事内容が軽いか重いかという
問題じゃなくて、やはり人にははそのことから
離れて気持ちを切り替えられる適度な休養が
必要なのだと思う。
彩菜は泣きそうに顔をゆがませ、そして話
した。会社での人間関係。一緒に仕事をし
ている女性のこと。
「全部初めて聞く話だった。きついだろ
うに
「わたしは大丈夫」と自分にも言い聞かせる
ように言う彩菜の肩が小さく震えていた。気
のきいた台詞ひとつ言うことが出来ず、俺は

r
e
d

s
e
a
s
o
n
∪
秋
∪
（
2
）
に
つ
づ
く

張 彩
れ 菜
そ の
う 震
ー え
と る
彩 肩
菜 を
は 抱
泣 き
き し
笑 め
い た
を 。
し ー
た わ
た
た し
、
頑